

新型コロナウイルス感染症の影響下における食肉業界の販売動向等

コロナ禍の食肉をめぐる状況

（2022年2月報告）

【 項 目 】

- I 牛豚部分肉取引の動向
- II 食肉需要の動向
- III 食肉関連販売先の売上動向
- IV 牛肉輸入の動向
- V 牛肉輸出の動向

公益財団法人 日本食肉流通センター

2022 年 2 月 14 日

コロナ禍の食肉をめぐる状況（2022 年 2 月報告）

公益財団法人日本食肉流通センター

新型コロナウイルス感染症の拡大は、2020 年に入ると、食肉業界に対しても目に見えて大きな影響を及ぼすようになり、2 年が経過した現在でもその影響は大きく残っています。当センターでは、この間、コロナ禍の食肉の価格や需給の動向について調査し、4 回にわたってホームページで報告をしてきました。

今回は、当センターの部分肉取引情報やその他関連のデータを用いて、この 2 年間を振り返り、コロナの食肉業界への影響が時間の経過とともに変化していく様子を報告します。2022 年に入ると、新たな変異株の感染拡大により食肉事業者からの報告内容は一変しますが、今回はその報告は含みません。

なお、2 年経過する中で、変化のあった時期がどのような時期だったかを思い起こすために、一部のグラフに東京都が緊急事態措置を実施した期間について背景色を付けています。

I 牛豚部分肉取引の動向

牛・豚の部分肉価格は、畜種や部位によって特徴的な動きをしてきました。ここでは、当センターの部分肉取引情報業務向けに食肉事業者から報告される情報を基にして、その中から国産食肉の代表的な部位の価格と取引量を取り上げて調査しました。

手法としては、対象とした部分肉の価格について、コロナの影響がまだ現れていない 2020 年 1 月価格を基準に指数化して、それぞれの動きを比較しました。和牛部分肉の取引量（重量）についても同様の手法により比較しました。

【対象とした部分肉】

牛肉：首都圏の取引のうち和牛チルド「4」、交雑牛チルド「3」、乳牛チルド「2」。
部位は、セット※、ヒレ、ロイン、ももセット※※。

豚肉：首都圏の取引のうち国産豚肉「Ⅰ」***。

部位は、セット※、ヒレ、ロース、もも。

※「セット」：枝肉(丸または半丸)から脱骨・整形加工して生産されるすべての部分肉がセットで取引される単位をいいます。

※※「ももセット」：枝肉(丸または半丸)から生産される部分肉のうちもも、しんたま、らんいち、そとももがセットで取引される単位をいいます。

※※※「Ⅰ」：豚枝肉規格が極上及び上から生産された部分肉の等級をいいます。

1 牛部分肉取引の動向

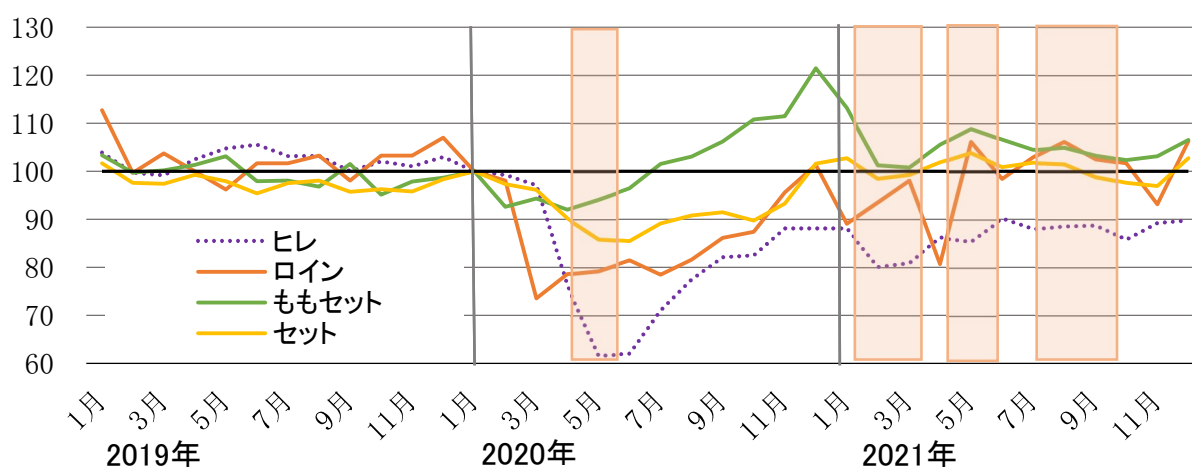
(1) 和牛部分肉（チルド「4」）

2020年に入ると、高級部位であるヒレとロインは、同年3～5月に価格が大きく低下しますが、ももセットは小さな影響に止まります。

2020年7月以降は、ももセットの指数が100を超えて年末にかけて大きく上昇しますが、2021年に入ると以前の水準近くに落ち着きます。

また、ロインの価格は、2020年7月以降に回復し、2021年5月以降は指数が100を上回ることが多くなります。一方、ヒレは、2021年7月以降価格が回復に向かいますが、以前の水準までは戻りきれずに現在に至っています。（図1）

図1 和牛チルド「4」 部位別価格指数の推移



注1. 価格指数＝各月の重量中央値／2020年1月の重量中央値×100

2. グラフ背景 は、東京都が緊急事態措置を実施した期間を示す。

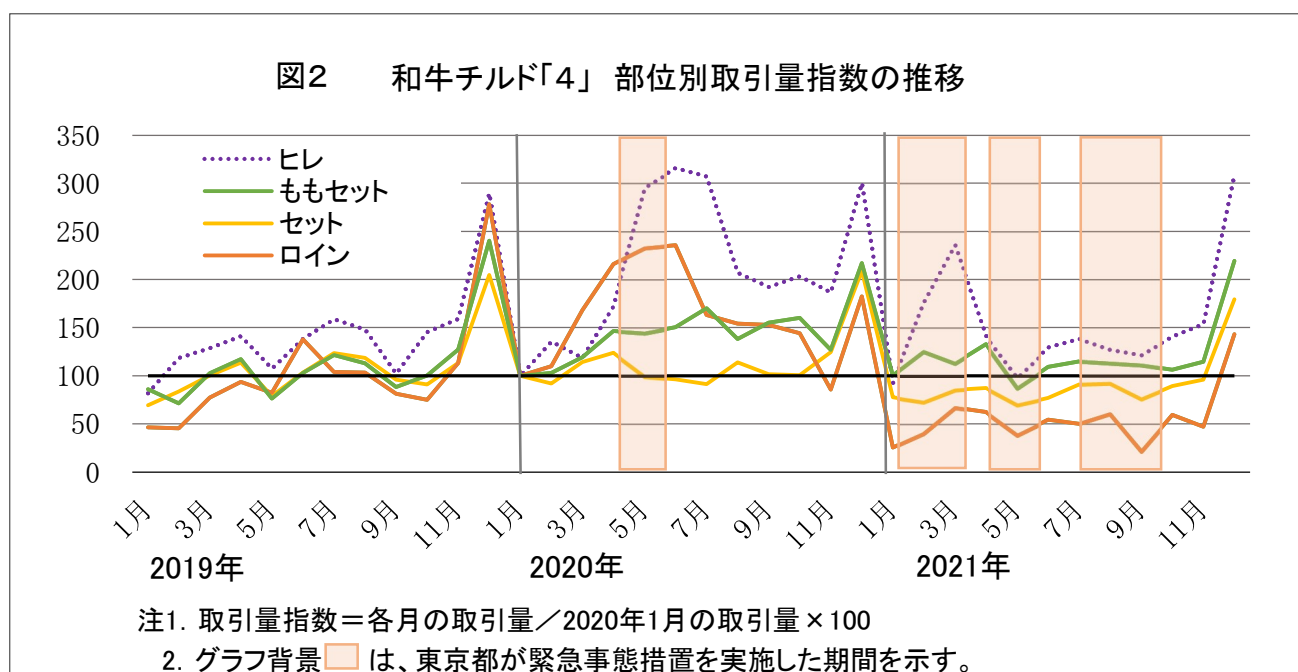
セットの価格は、他の部位の価格よりも緩やかな動きを示していますが、2020年6月の底値から着実に回復して2021年には以前の水準以上で推移しています。

ももセットは、2020年には巣ごもり需要を受けて量販店等から安価な部位として需要が強まりますが、2021年に入るとその需要も落ち着いてきます。価格の動きはその状況を反映したものとなっています。2021年11月になると、ももはだぶつき気味へと変わってきたという食肉事業者の話も聞かれるようになりましたが、価格は以前の水準を下回る状況にはなっていません。

ロインやヒレなどの高級部位は、2020年には需要が弱く、この時期には食肉事業者から「余剰なものとなってしまう、さばくのに苦労している。」という指摘がありましたが、2021年度後半になると、ロインの需要が回復してきたとの報告を受けています。価格もこれらの報告を裏付ける動きをみせています。

ヒレについては、2021年に入ってもロインと比べて需要が回復しているという声は少なく、価格は以前の水準まで回復してはいない状況です。

一方、取引量の動きを見ると、2020年の4月から、余り気味となっているはずのロインとヒレが急激に増加します。この動きは、前年の取引量や、交雑種や乳牛ではみられません。(図2)

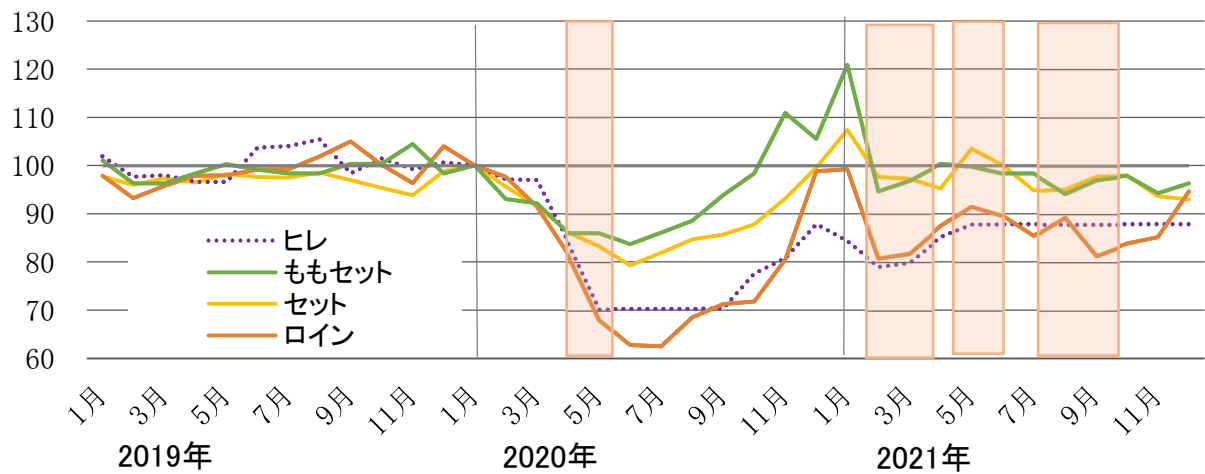


2020年4月には、和牛を対象として農林水産省の学校給食提供と冷凍保管支援の事業が動き出し、取引量の増加に影響したものとされます。

2021 年に入ると、ロインの取引量が低い水準で推移します。また、セットの取引量も、後述の交雑牛や乳牛と同じように低い水準となります。

(2) 交雑牛（チルド「3」）及び乳牛（チルド「2」）

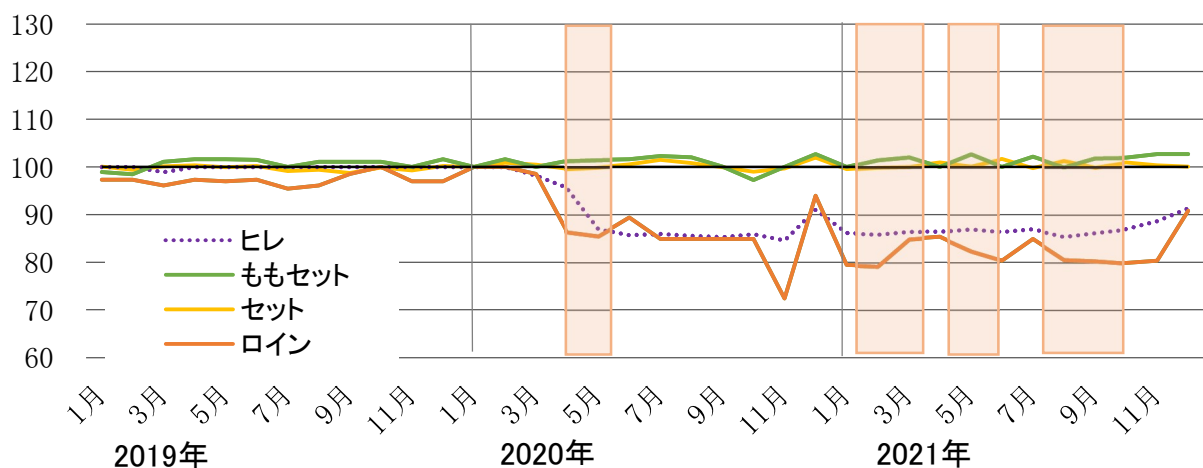
図3 交雑牛チルド「3」 部位別価格指数の推移



注1. 価格指数＝各月の重量中央値／2020年1月の重量中央値×100

2. グラフ背景 は、東京都が緊急事態措置を実施した期間を示す。

図4 乳牛チルド「2」 部位別価格指数の推移



注1. 価格指数＝各月の重量中央値／2020年1月の重量中央値×100

2. グラフ背景 は、東京都が緊急事態措置を実施した期間を示す。

交雑牛と乳牛の価格についても、多くの部分肉で2020年前半に低下する和牛と同様の動きが見られますが、乳牛のセットとももセットの指数が100前後で固定的に推移していること、交雑牛及び乳牛のヒレ、ロインで以前の水準まで回復していないことなど和牛とは異なる動きがみられます。

ただし、交雑牛と乳牛ともにロインの価格が需要期である2021年12月に上昇しています。食肉事業者からは、この年末にかけて、それまで低調であったホテルや外食から手頃な両者のロインの引きが強くなったとの報告があります。(図3、図4)

両者の取引量について部位ごとの2019年比をみると、一部を除き2020年、そして2021年と低下します。

2021年と2019年の取引量を部位で比較すると、セットとももセットの取引量の低下がヒレとロインより大きくなっています。いわゆる「セットもの」販売によって価格低下や部位のアンバランスを避けたいとする食肉事業者の意に反して、実際の取引はパーツ取引が進む状況になっています。(表1、表2)

表1 交雑牛の部分肉取引量の2019年比

部位	2020年	2021年
ヒレ	89.8%	84.4%
ロイン	94.3%	89.8%
ももセット	74.9%	73.9%
セット	107.5%	73.7%

表2 乳牛の部分肉取引量の2019年比

部位	2020年	2021年
ヒレ	77.2%	68.7%
ロイン	72.2%	46.0%
ももセット	85.1%	69.9%
セット	69.9%	39.2%

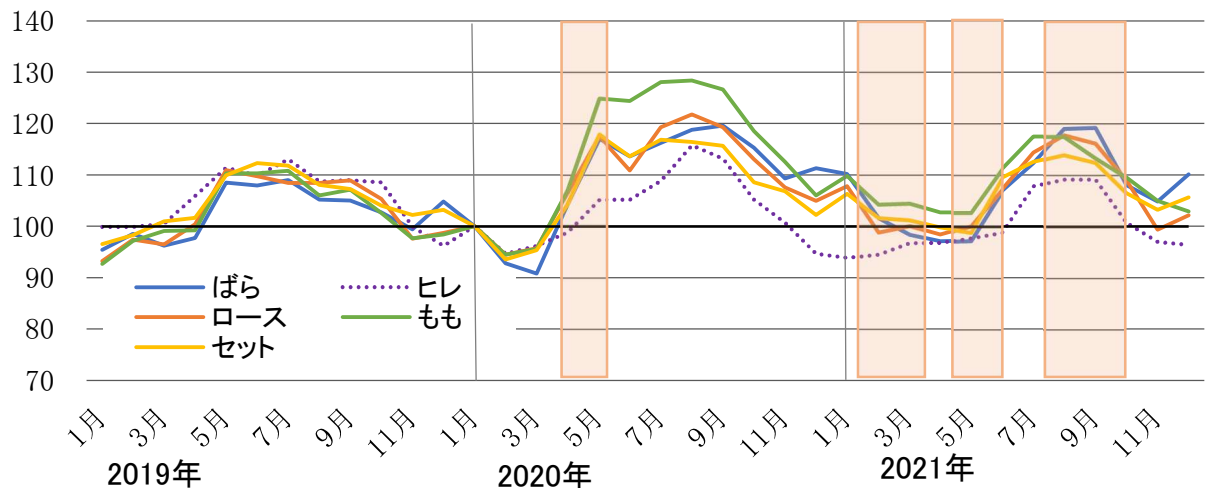
2 豚部分肉取引の動向

国産の豚部分肉(「I」)については、2020年に入ると、巣ごもり需要により量販店などでの販売が増大し、部分肉の価格も同年5月から大きく上昇しました。その後も価格は季節的な変動があるものの好調に推移してきました。(図5)

食肉事業者からは、2021年10月ごろから販売は平年ベースに落ち着いてきたとの報告もありますが、同時期の部分肉価格は比較的好調な状況が続いています。

また、コロナの影響が出はじめてから、価格指数の部位間の差が増大し、2021年に入るとその差は縮まりますが、以前のように戻っていません。部位の中ではヒレの価格指数が他の部位よりも低い水準で推移しています。

図5 首都圏：豚カット肉「I」 部位別価格指数の推移



注1. 価格指数＝各月の重量中央値／2020年1月の重量中央値×100
 2. グラフ背景□は、東京都が緊急事態措置を実施した期間を示す。

表3 豚の部分肉取引量の2019年比

取引重量について部位ごとの2019年比をみると、好調な需要を反映して各部位とも100%を超えています。豚の部分肉取引量を部位で比較すると、交雑牛や乳牛とは対照的に、2021年には販売の好調さを反映してセットの取引量が大きく伸びています。

部位	2020年	2021年
ヒレ	121.2%	101.7%
ロイン	117.2%	111.7%
ももセット	112.0%	104.4%
セット	114.0%	124.6%

II 食肉需要の動向

1 牛肉需要（推定出回り量）の動向

牛肉の国内需要量を表す推定出回り量（独立行政法人農畜産業振興機構が需給表で公表）をみると、コロナの影響が現れた2020年3～5月の需要量が前年同期を大きく下回りますが、年計では前年比98.1%、924千トンとなりました。

2021年には6月、7月、9～11月の需要が前年同期を大きく下回り、年計で前年比97.6%、902千トンと前年を下回る状況が続きました。2021年までは、牛肉需要についてコロナの影響から回復がみられるという状況にはなっていません。

国産牛肉についてみると、2020年には農林水産省の補助事業で学校給食への和牛肉利用や新規需要拡大が進んで前年比102.2%と前年を上回りますが、2021年には反動により前年比98.6%と前年を下回っています。

輸入牛肉については、2020年は外食等の需要減少などによって前年比96.0%と前年を下回り、2021年には現地価格の上昇等も影響し、前年比97.0%と前年を下回る状況が続いています。（図6、表4）

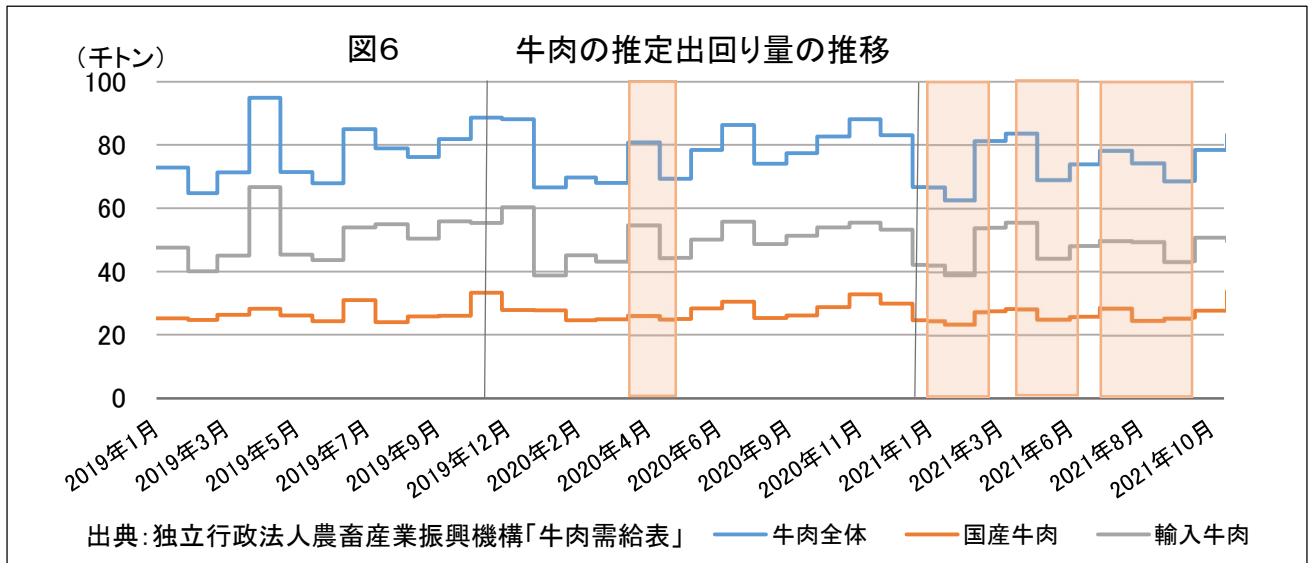


表4 牛肉の推定出回り量

（単位：トン）

	2019年	2020年		2021年	
	推定出回り量	推定出回り量	（前年比）	推定出回り量	（前年比）
牛肉全体	941,730	923,972	（ 98.1% ）	901,847	（ 97.6% ）
うち国産品	322,654	329,776	（ 102.2% ）	325,300	（ 98.6% ）
うち輸入品	619,076	594,193	（ 96.0% ）	576,548	（ 97.0% ）

出典：独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」

2 豚肉需要量（推定出回り量）の動向

豚肉の推定出回り量は、2020年は、外食が振るわない一方で家庭内の需要が伸びたことにより年計では前年比100.4%、1,818千トンとなりました。月ごとの需要量の動きをみると、月により増減はありますが傾向はつかめません。

2021年に入ると、量販店などの販売が落ち着いてきたとの報告もありましたが、需要は堅調で、年計で前年比101.4%、1,843千トンと前年をわずかに上回っています。

国産豚肉についてみると、2020年は家庭内需要の伸びから前年比102.3%と前年を上

回りますが、2021 年は、その動きも落ち着いて前年同期比 100.6%と前年並となっています。

輸入豚肉については、2020 年は外食等の需要減少や主要輸出国である米国の食肉工場稼働の低下などを反映して前年比 98.6%と前年を下回りました。2021 年には、米国の食肉工場稼働の改善がみられましたが、現地価格の上昇やカナダの洪水なども影響し前年比 102.2%と前年をわずかに上回る状況に止まりました。（図 7、表 5）

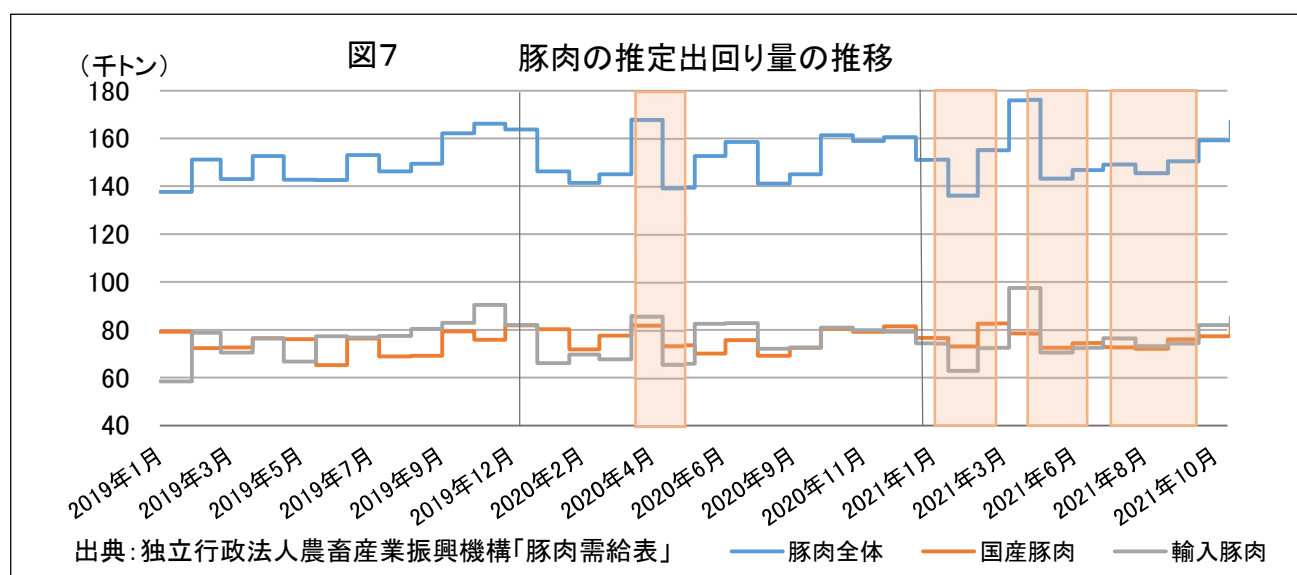


表5 豚肉の推定出回り量

(単位:トン)

	2019年	2020年	2021年
	推定出回り量	推定出回り量 (前年比)	推定出回り量 (前年比)
豚肉全体	1,810,689	1,817,830 (100.4%)	1,843,424 (101.4%)
うち国産品	893,029	913,165 (102.3%)	918,591 (100.6%)
うち輸入品	917,660	904,665 (98.6%)	924,833 (102.2%)

出典：独立行政法人農畜産業振興機構「豚肉需給表」

Ⅲ 食肉関連販売先の売上動向

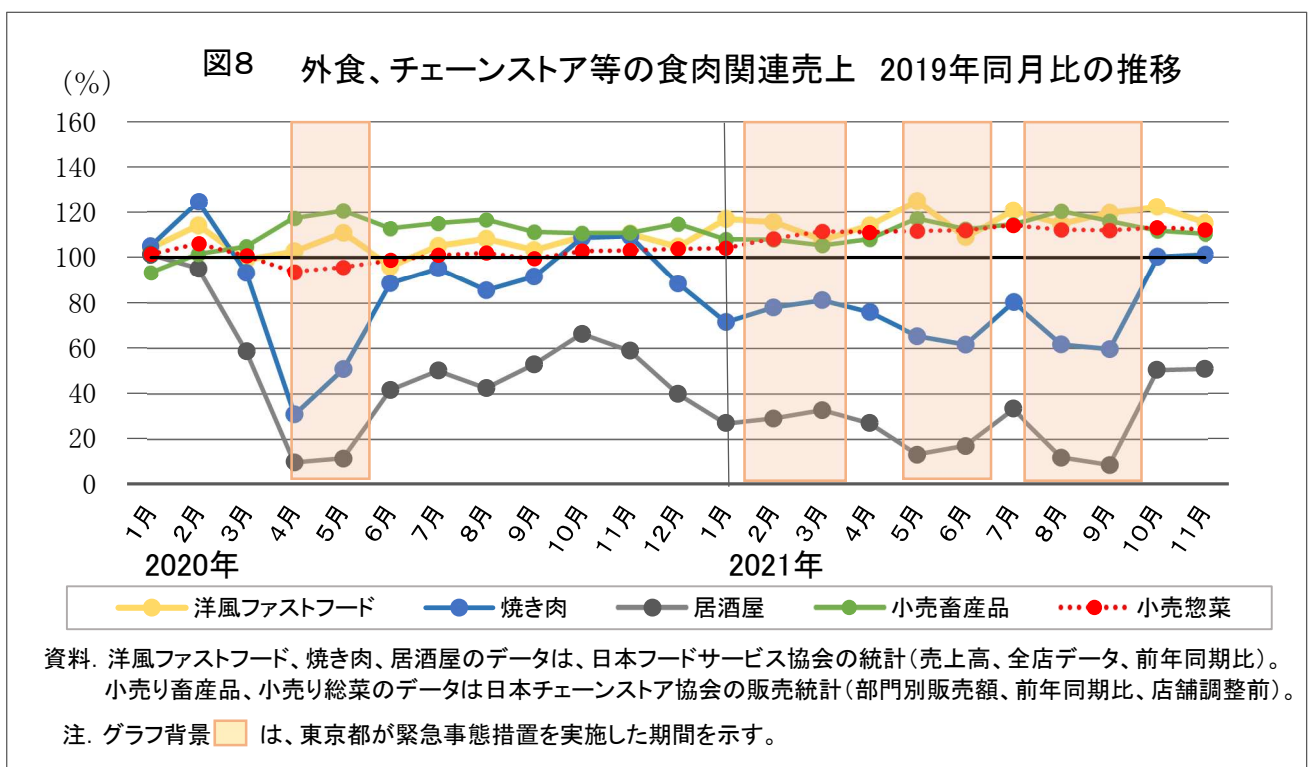
食肉事業者の主な販売先の売上げ（全国）について、事業者団体の公表数値を用いて月ごとの動きをみました。用いるデータは、コロナの影響を受ける以前と比較するために 2019 年同月比としました。

1 「焼き肉」及び「居酒屋」

外食の「焼き肉」と「居酒屋」の売上げは、2020年3～4月に大きく減少します。その後、「焼き肉」は前年並みまで回復しますが、「居酒屋」は前年より大幅に低い水準で推移しました。

2020年末から2021年9月にかけて、再び「焼き肉」と「居酒屋」の売上げが減少し、低迷状態が続きます。2021年9月30日をもって、すべての区域で緊急事態宣言等が解除されてから売上げが増加しますが、それでも「居酒屋」では2019年比50%水準に止まっています。

「焼き肉」と「居酒屋」の売上げの動きと緊急事態措置の宣言の期間を重ね合わせてみると、宣言（措置）とその解除に大きな影響を受けていることがわかります。（図8）



2 「洋風ファストフード」

食肉関連の外食の中で、ハンバーガー等の「洋風ファストフード」の売上げは、2020年から概ね前年を上回って推移し、2021年に入っても堅調に増加傾向が続いています。この間、ファストフード店でのテイクアウトなどの販売形態がコロナ禍での売上げに寄与してきたとの報道も多くみられました。（図8）

3 「小売畜産品」及び「小売惣菜」

量販店等において食肉と関連の深い「小売畜産品」と「小売惣菜」の売上げについて

みると、両者とも着実に増加し続けています。

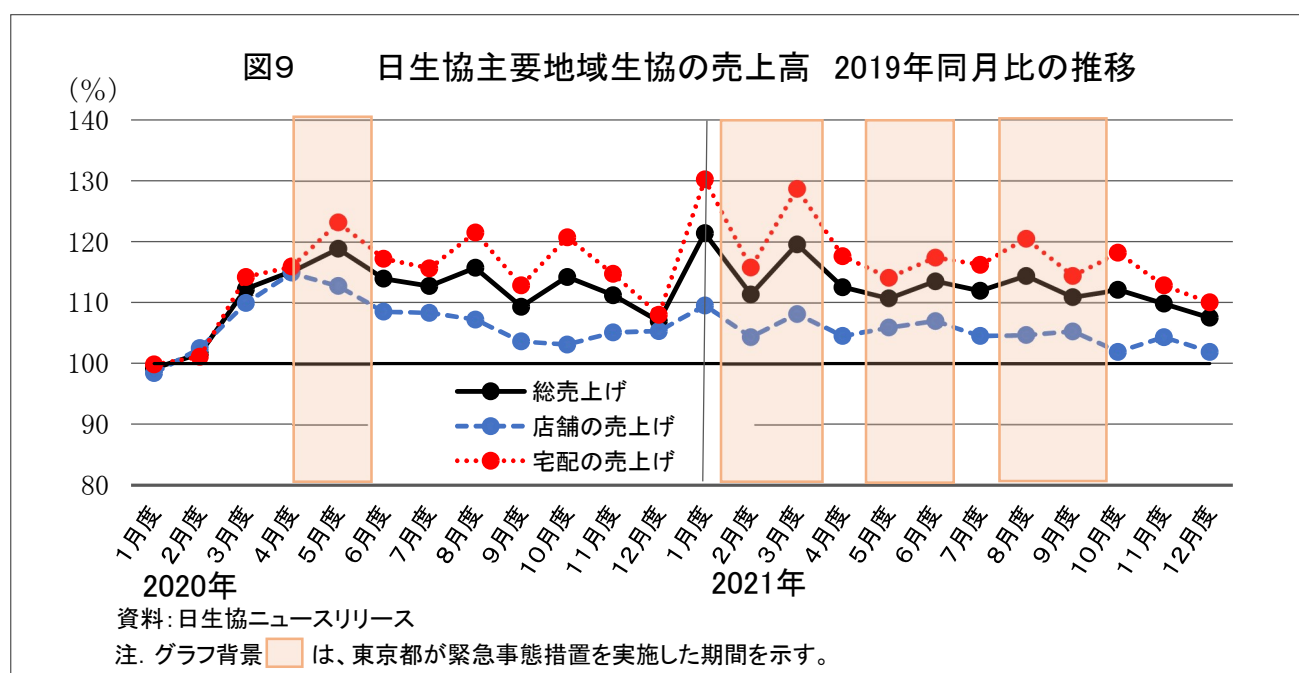
惣菜は、2020年3～5月頃にはコロナ対応のために、バイキング方式から個別包装による販売への転換が行われて一時売上げの停滞がみられましたが、その後、増加に転じました。(図8)

両者の売上げの着実な上昇から、コロナの影響によって家庭での調理や惣菜の利用などの回数が増え、定着してきたことが伺えます。

4 宅配の売上動向

2020年にコロナの影響が大きくなりはじめると、生協や専門業者による食材の宅配が盛んになっているとの報道が多くみられました。宅配される食材には食肉も主力商品として扱われています。

ここでは、コロナ禍での宅配の売上げについて、「主要地域の売上高」として販売形態別に公表している日本生活協同組合連合会を事例として取り上げ、その売上動向を2019年同期比でみました。(図9)



2020年に入ると、コロナの影響が出はじめる3月ごろから売上高は全体的に伸びますが、同年5月になると宅配の売上高の伸び率が店舗を上回りはじめます。その後、両者の2019比の差が保たれたまま安定して推移してきました。両者の差が開いていく状況にはないようですが、コロナの影響によって増加した宅配の売上高は維持されているようです。

なお、日本生活協同組合連合会の「主要地域の売上高」では、総売上高に占める各販売形態のシェアは、2021年12月度で店舗が29.9%、宅配が67.9%、その他が2.2%となっています。

IV 牛肉輸入の動向

1 牛肉輸入の動向

牛肉の輸入数量については、2020年はコロナ禍の影響による外食等の需要減少に加えて米国での食肉工場稼働率の低下などを反映して前年比97.5%、600千トンと前年を下回りました。2021年に入っても国内需要は回復せず、また現地価格の上昇もあり、前年比97.4%、585千トンと続けて前年を下回る状況となりました。（図10、表6）

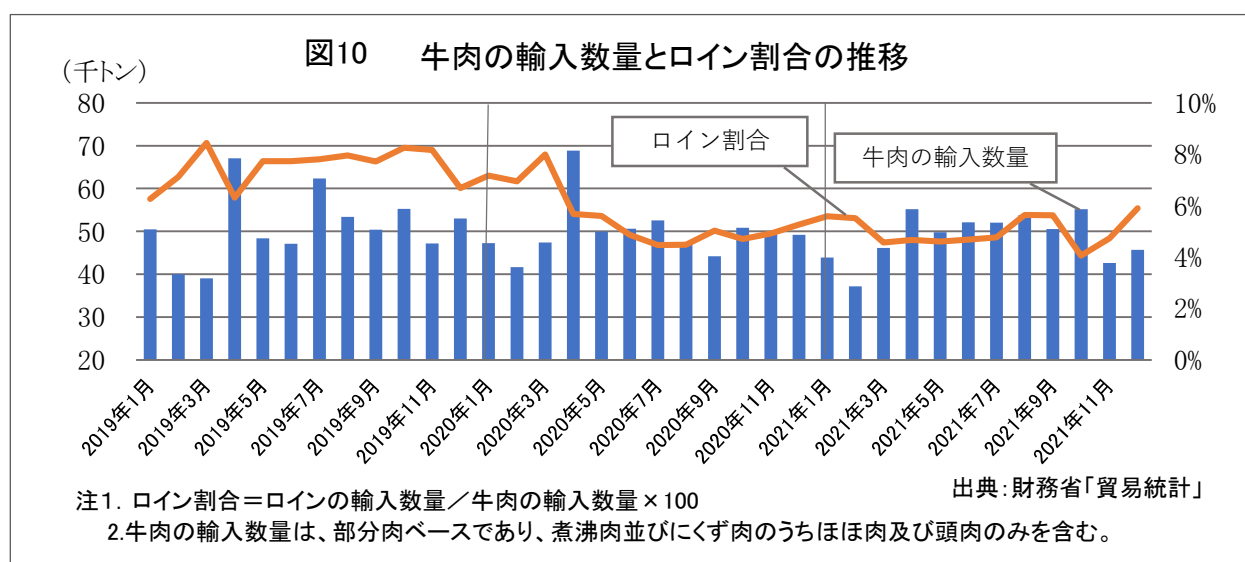


表6 牛肉の輸入数量

(単位:トン)

	2019年	2020年	2021年
	輸入数量	輸入数量 (前年比)	輸入数量(前年比)
牛肉全体	615,461	600,314 (97.5%)	584,519 (97.4%)
うちロイン	45,891	33,322 (72.6%)	29,077 (87.3%)
うちロイン以外	569,570	566,992 (99.5%)	555,442 (98.0%)

出典：財務省「貿易統計」より算出

注：部分肉ベースであり、煮沸肉並びにくず肉のうちほほ肉及び頭肉のみを含む。

ロイン系（ヒレを含む。以下「ロイン」という。）の輸入数量についてみると、国内で

コロナの影響が顕著になる 2020 年 4 月から大きく減少して低い水準となります。2021 年に入っても同様の水準で推移しますが、12 月にはやや増加します（2020 年の前年比 72.6%、2021 年の前年比 87.3%）。

ロイン以外の輸入数量については、ロインのような大きな減少ではありませんが、前年を下回って推移しています（2020 年の前年比 99.5%、2021 年の前年比 98.0%）。

この結果、輸入数量におけるロインの割合は、2019 年は 7.5%だったものが、2020 年は 5.6%、2021 年は 5.0%と低下してきました。

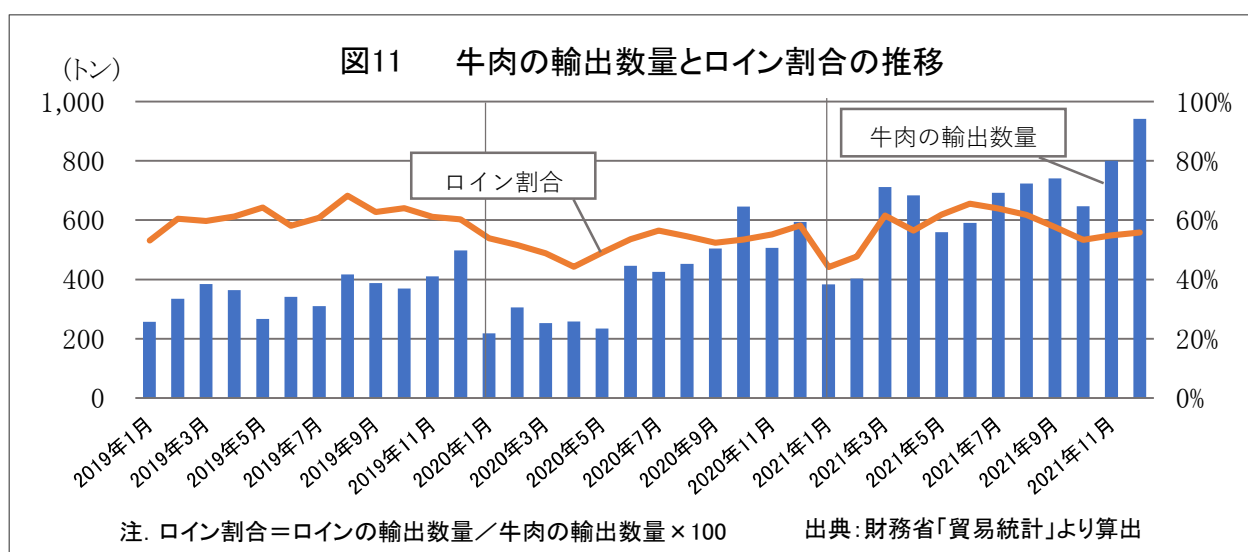
このような状況から、2020 年に食肉事業者が指摘していた「和牛ロイン系を中心として高級価格部位は荷動きが鈍い。」というコロナの影響は、輸入物のロインにも共通のものであり、2021 年もその状況は続いていることがわかります。

V 牛肉輸出の動向

コロナの食肉業界への影響が続く中で、食肉事業者からは、国内での和牛肉の需給、特にロインの需給について、輸出が調整機能を果たしているとの声が多く聞かれるようになっていきます。

1 牛肉輸出、特にロイン輸出の動向

我が国の牛肉の輸出数量は、コロナの影響が出る前の 2019 年は順調に伸びて前年をかなり上回りました（前年比 121.9%）。2020 年に入ると世界の経済活動にコロナの影響が出はじめ、同年 5 月までの間、我が国の牛肉輸出数量は減少に転じ、特にロインの輸出が大きく減少しました。



2020 年後半になると牛肉輸出は増加に転じ、年計では前年比 111.6%となりました。2021 年 3 月以降、ロインの輸出が大きく伸び、その結果、2021 年のロインの輸出数量は対前年 176%の 4,546 トンとなりました。(図 11、表 7)

表7 牛肉の輸出数量

(単位:トン)

	2019年	2020年		2021年
	輸出数量	輸出数量	(前年比)	輸出数量(前年比)
牛肉全体	4,339	4,844	(111.6%)	7,877 (162.6%)
うちロイン	2,664	2,590	(97.2%)	4,546 (175.5%)
うちロイン以外	1,675	2,255	(134.6%)	3,333 (147.8%)

出典:財務省「貿易統計」より算出

注: 部分肉ベースである。

2021 年のロインの輸出数量 4,546 トンを全量が和牛と仮定すれば、国内の和牛ロイン系供給数量に対する輸出の割合は 2 割を占める水準になっていると試算されます(参考試算)。

これは、輸出は国内の和牛ロインの需給改善に寄与しているという食肉事業者の声に符合する状況といえます。

【 参考試算 】 和牛ロイン系生産量に占める輸出割合

2019 年 2020 年 2021 年
13% → 12% → 20%

※輸出割合=ロイン輸出数量/推定和牛ロイン系生産量

試算の前提

- ・輸出されたロインはすべて和牛と仮定。
- ・推定和牛ロイン系生産量=和牛枝肉生産量(「食肉流通統計」)×0.7(部分肉歩留)×0.14(ロイン系の構成割合)

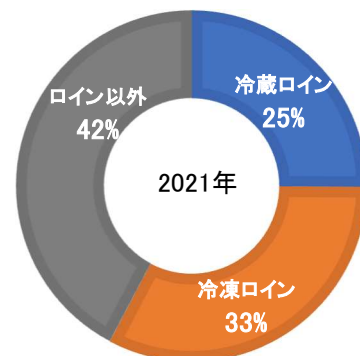
2 牛肉輸出におけるロインの割合

1 で記述したように 2021 年には、ロインの輸出数量が大きく伸び、ロイン割合が全体の約 6 割と、コロナの影響が出る前に近い水準まで戻っています。(図 12)

1 頭での部位の重量構成割合が 14%程度であることを踏まえると、この割合からは、輸出はかなりロインに傾斜していると考えられます。

輸出されるロインの冷蔵と冷凍の比率は概ね 4 : 6 であり、冷凍の方が多くなっています。

図12 牛肉輸出数量の構成



出典:財務省「貿易統計」より算出。
注. 部分肉ベースである。

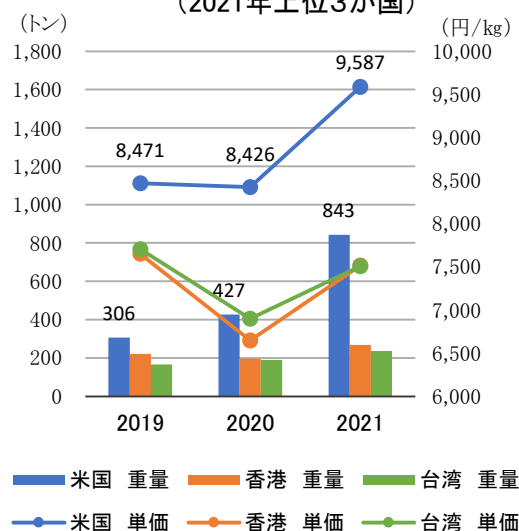
3 ロイン輸出における冷蔵と冷凍の比較

(1) 冷蔵ロイン

ロイン輸出数量の約 4 割を占める冷蔵ロインにおいては、2021 年で米国、香港、台湾が輸出先上位 3 か国となっており、この 3 か国向け数量は全体の 68%を占めます。1 位の米国向け数量は冷蔵ロイン全体の 43%を占めます。

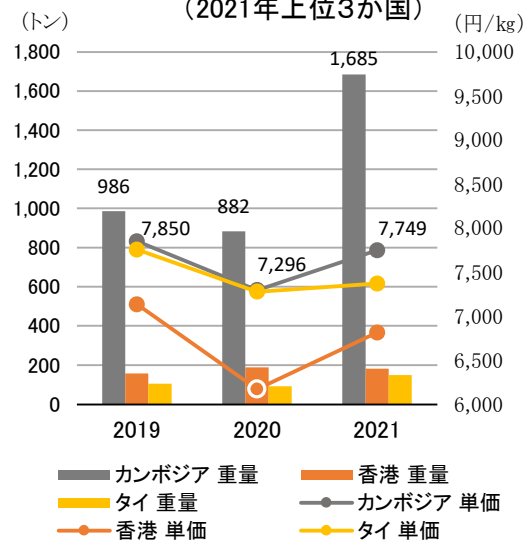
米国向け数量は、2021 年は 2019 年の 2.8 倍以上と大きな伸びとなっており、その取引単価は香港や台湾を大きく引き離し、高い水準にあります。(図 13)

図13 冷蔵ロインの輸出数量と単価の推移
(2021年上位3か国)



出典:財務省「貿易統計」より算出。

図14 冷凍ロインの取引重量と単価の推移
(2021年上位3か国)



出典:財務省「貿易統計」より算出。

(2) 冷凍ロイン

ロイン輸出数量の6割を占める冷凍ロインにおいては、2021年でカンボジア、香港、タイが輸出先上位3か国となっており、この3か国向け数量は全体の79%を占めます。1位のカンボジア向け数量は冷凍ロイン全体の66%を占め、高いシェアとなっています。

カンボジア向け数量は、2021年は2019年の1.7倍と大きな伸びとなり、その取引価格は香港向けより高く、タイ向けと同水準となっています。

食肉事業者から「アジア向けの牛肉輸出は、価格が安く利益の確保がむずかしい。」との報告がありますが、冷蔵ロインの米国向け単価と比べると、アジア主要国向け単価は冷蔵・冷凍ともその8割水準以下となっており、報告の実態を裏付ける数値となっています。

(以上)

(問合せ先)

公益財団法人日本食肉流通センター

情報部 小野 雄平

TEL : 044-266-1172